『コリオレイナス』における「母性」、「家族」、「国家」

朱　雀　成　子

I　序

『コリオレイナス』に、美徳というものは時代の解釈次第だ（“So our virtues ／ Lie in th' interpretation of the time”（IV. vii. 49-50））[1] というオーフィディアスの言葉がある。マーシャス ／ コリオレイナスの母ヴォラムニアは、ローマの賢母として元老院をはじめ、皆から賛美されるが、その理由は息子を説得してローマを劫火から救った功績のためである。しかし、彼女の母としての美徳は、時代の解釈によっては美徳とされず、非難の対象となるであろう。「母性」は、時代や状況によっていろいろの顔をみせ、子供を慈しみ育てるプラスのイメージとともに、支配的で破壊的なマイナスのイメージを併せもっている。[2] 女は、男との関係では被害者の立場に置かれがちであるが、子供に対しては母として加害者となる可能性がある。

ヴォラムニアは、「母性」のマイナスイメージを考察するには格好の人物である。彼女の「母性」には、「飲み込み、同一化をはかり、独立を認めない」といったネガティヴな側面が凝縮して具現されている。母と息子があまりにも密着しており、歪んだ親子関係を築いている。ヴォルサイの将軍、オーフィディアスは、母親の説得に屈服したコリオレイナスを皮肉って次のように言う。

Aufidius　He has betrayed your business, and given up,
For certain drops of salt, your city, Rome—

I say your city — to his wife and mother,
Breaking his oath and resolution like
A twist of rotten silk, never admitting
Counsel o'th' war. But at his nurse's tears
He whined and roared away your victory, (V. vi. 94-100)

"his nurse's" (99) とは、コリオレイナスを母乳で育てたヴォラムニアのことである。オーフィディアスはさらに、ヴォラムニアに服従して涙を流すコリオレイナスを 'boy' という言葉を使って「泣き虫小僧」と称する。

Aufidius
Name not the god, thou boy of tears. (V. vi. 103)

コリオレイナスの幼児性を鋭敏に感じ取ったオーフィディアスのこの表現は、コリオレイナスの "choler" (III. I. 86) を触発し、激怒したコリオレイナスは、立て続けに三回もこの 'boy' を繰り返す。

Coriolanus
Measureless liar, thou hast made my heart
Too great for what contains it. '*Boy*'? O slave!
(V. vi. 104-5) (イタリックは筆者)

Coriolanus
Cut me to pieces, Volsces. Men and lads,
Stain all your edges on me. '*Boy*'! False hound,
If you have writ your annals true, 'tis there
That, like an eagle in a dovecote, I
Fluttered your Volscians in Corioles.
Alone I did it, *boy*! (V. vi. 112-17) (イタリックは筆者)

ヴォラムニアにとっては、コリオレイナスは結婚し子どもがいてもなお、大人の男ではなく 'my boy' という存在であり、支配と管理の対象なのである。

> *Volumunia* Honourable Menenius, my boy Martius approaches. (II. i. 97-98)

この母と息子の間には、自立した大人同士の関係が築かれていない。コリオレイナスは、何をするにも母の褒め言葉を期待し ("Rather say I play / The man I am." (III. ii. 15-16))、母の許しをほしがり ("I muse my mother / Does not approve me further" (III. ii. 7-8)) 、母を相談役にする ("Pray be counselled" (III. ii. 28))。母との対話は数十行に及ぶほど長く、何回も繰り返されるのに比較して、妻との対話はわずか数行で極端に少ない。また、息子の小マーシャスに対しては、彼を 'my son' の代りに "the grandchild" (V. iii. 24) と表現するなど、父親の感情表出は少なく父性欠如が指摘できる。本論ではヴォラムニアの「母性」を中心に、息子、嫁、孫などの「家族」とローマという「国家」との関係を考察する。

II ヴォラムニアの自己実現のモノとしてのコリオレイナス

(1) スパルタの母

一幕三場に、ヴォラムニアが、嫁のヴァージリアを前に息子マーシャスの幼児期、思春期の頃を物語る回想場面がある。

> *Volumnia* When yet he was but 5
> tender-bodied and the only son of my womb, when youth with comeliness plucked all gaze his way, when for a day of kings' entreaties a mother should

not sell him an hour from her beholding, I, considering how honour would become such a person—that it 10
was no better than, picture-like, to hang by th' wall if renown made it not stir—was pleased to let him seek danger where he was like to find fame. To a cruel war I sent him, from whence he returned his brows bound with oak. 15

(I. iii. 5-15)

ヴォラムニアは、マーシャスがお腹を痛めた唯一の子供であり、長じて美しい若者となった息子をたとえ王様の要望であれ一時間でも離したくはなかった、と告白している。そこには一人息子を溺愛し、すべての時間を彼一人のために捧げ、息子のために生きようとする母の姿が表現されている。ローマ時代、上流の家では乳母を雇うのが普通であったと思われるが、彼女は自ら赤ん坊に授乳し理想的な育児をしようとした。しかもわざわざ、子供を一人しか産もうとしなかったことが後に知らされる。注目すべきことは、ヴォラムニアはマーシャスが幼児の頃から、"honour" (10) こそ息子にふさわしいと考えていたことである。ヴォラムニアは、"a man-child" (I. iii. 16) の誕生を喜び、手塩にかけて育て、かつ慈しむ心をもっていた。しかしながら、その感情はいつしか抑圧され、国のために息子を差し出す母、名誉の傷（その数は、コリオライ征伐までに 27 箇所）を喜ぶ母へと変化していく（"O, he is wounded, I thank the gods for't!" (II. i. 118))。マーシャスが受けた傷の箇所を聞くメニーニアスに、ヴォラムニアは誇らしげに答える。

Volumnia I'th' shoulder and i'th' left arm. There will be large cicatrices to show the people when he shall stand for his place. He received in the repulse of Tarquin seven hurts i'th' body.

Menenius One i'th' neck and two i'th' thigh—there's nine that I know.

Volumnia He had before this last expedition twenty-five wounds upon him.

Menenius Now it's twenty-seven. Every gash was an enemy's grave. (II. i. 143-52)

ヴォラムニアは、赤ん坊の頃の柔らかい体の感触を覚えているにもかかわらず、戦争で息子が傷つくことに抵抗はない。C. カーン（Coppélia Kahn）は、スパルタの母について興味ある指摘をしている。

One version of the Spartan complementarity between motherhood and the martial ethos appears in a text available to Shakespeare, Plutarch's *The Sayings of Spartan Women*. The great majority of speakers in these vignettes are mothers, who either excoriate their sons for not meeting the highest standards of courage on the battlefield, or, rejoicing that their sons have died bravely, conspicuously eschew grieving for them. Two examples typify the style and point of the sayings:

> One woman sent forth her sons, five in number, to war, and standing in the outskirts of the city, she awaited anxiously the outcome of the battle. And when someone . . . reported that all her sons had met death, she said, 'I did not inquire about that, you vile varlet, but how fares our country?' And when he declared that it was victorious, 'Then,' she said, I accept gladly also the death of my sons.'
>
> Another, hearing that her son had been slain fighting bravely in the line of battle, said, 'Yes, he was mine.' But learning in regard to her other son that he had played the

coward and saved his life, she said, 'No, he was not mine.' [3]
(1931: 461-3, 465-7)

戦死を恐れるヴァージリアと対照的に、ヴォラムニアは息子が戦死すれば、名誉が息子の代わりになると割り切れる母親であり、スパルタの母の仲間である。先ほどのスパルタの母を彷彿とさせるヴォラムニアとヴァージリアの会話である。

Virgilia But had he died in the business, madam, how then?
Volumnia Then his good report should have been my son. I therein would have found issue. Hear me profess sincerely: had I a dozen sons, each in my love alike, and none less dear than thine and my good Martius, I had rather had eleven die nobly for their country than one voluptuously surfeit out of action. (I. iii. 18-25)

ヴォラムニアに12人息子がいて、どの子もマーシャスのように大事に思えても、その1人が戦に行かず酒色に溺れているならば、残りの11人が国のために死んでくれるほうを望む、という彼女の発言は、1人の不肖の息子のためには残りの息子すべてを差し出してもよいというファシズム的なイデオロギーに染められており、彼女は、「国家」のために息子が戦死することを一番の誇りとする熱狂的な軍国主義の母となっている。ヴォラムニアは息子を案じるという感覚を喪失している。マーシャスが血を流すことを好む母と、それを嫌悪する嫁との相違は、次の会話で際立っている。

Virgilia
His bloody brow? O Jupiter, no blood!
Volumnia

Away, you fool! It more becomes a man
Than gilt his trophy. The breasts of Hecuba
When she did suckle Hector looked not lovelier
Than Hector's forehead when it spit forth blood
At Grecian sword, contemning. (I. iii. 39-44)

ヴォラムニアは、ヘクターに乳を与えるヘキュバの胸の美しさも、ヘクターの血まみれの額程には美しくないと語るが、乳よりも血を好むのは、愛よりも名誉を重んじる考えである。ヴァジーリアがコリオレイナスの身体を心配して血への恐怖心を抱いているのとは対照的であり、ヴォラムニアはマクベス夫人に近い。戦争で名誉を得ることが最高の栄誉という時代と社会背景の中では、非人間的なことが、非人間的に見えなくなってしまう。戦争は男、平和は女という二項対立の図式は、ヴォラムニアには当てはまらず、ヴォラムニアと戦争は相互補完的なコインの表裏となっている。[4]「母性」は、歴史的にみてナショナリズムと相性がよい。ローマの軍国主義イデオロギーに完全に絡めとられた軍国主義の母としてのヴォラムニアは、ローマの対外的侵略戦争に加担している。

(2)自己実現のためのモノとしての息子

ヴォラムニアは、オックスフォード版の編者R. パーカー (R. B. Parker) が指摘するように[5]、再婚をせずにマーシャスだけを産み育て、息子夫婦を自分の家に住まわせている、伝統的なローマの未亡人 'the traditional Roman matron' である。ヴォラムニアの夫のことはテクストには何も言及されない。ヴォラムニアによる息子の教育は、子供をある理想の「かたち」、フォルムに矯正、あるいは整形するというもので、ギリシア以来のヨーロッパの教育思想に貫流している発想である。[6] ヴォラムニアは、肉体的にも精神的にも息子を鋳型にはめて養育し、武人に仕立てた感がある ("Thou art my warrior, / I holp to frame thee." (V. iii. 62-63))。

一人息子だけを生きがいとしたヴォラムニアの永年の夢が語られる。

Volumnia I have lived
To see inherited my very wishes,
And the buildings of my fancy. Only
There's one thing wanting, which I doubt not but
Our Rome will cast upon thee. (II. i. 194-98)

ヴォラムニアの望みは息子によって一つ一つ実現されてきた。彼女が息子に望む最後の夢とは、執政官の地位である。第一の市民が鋭くも推察したように、コリオレイナスはこれまで国のためではなく、母を喜ばし、自分のプライドのために戦ってきたところがある（"Though soft-conscienced／men can be content to say it was for his country, he／did it to please his mother and to be partly proud" (I. 1. 34-36))。ヴォラムニアには執政官の母としてのアイデンティティを持ちたいというエゴイズムがある。母と息子は、一致団結して夢の実現のために頑張った。コリオレイナスの勇気は、気丈な母の乳を吸うことで母から継承したものであり（*Volumnia*: "Thy valiantness was mine, thou suck'st it from me" (III. ii. 132))、また，コリオレイナスは母の褒め言葉によって兵士に仕立てられた（*Volumnia*: "My praises made thee first a soldier" (III. ii. 110))。ヴォラムニアが息子に常々語っていたことがある。その物語のなかでは母と息子の関係は、妻と夫の関係にずらされている。

Coriolanus Resume that spirit when you were wont to say,
If you had been the wife of Hercules
Six of his labours you'd have done, and saved
Your husband so much sweat. (IV. i. 17-20)

もしヴォラムニアがハーキュリーズの妻であったならば、12の苦行のうち

半分は自分が成し遂げ、夫の労苦をねぎらうという彼女の発言は、コリオレイナスがメニーニアスによってハーキュリーズに喩えられる（IV. vi. 104）ことを考慮すると、まるでコリオレイナスとヴォラムニアがカップルであるかのような印象を与える。二人の間に妻が入りこむ隙間はなく、ヴォラムニアは「夫」を支え助ける「妻」のような役割をしている。それはあたかも現代の母と子の受験戦争のようで、二人三脚で頑張ってきた二人の過去を物語るエピソードである。子供可愛さゆえに自分をもたない母の陥る落し穴である。この母と息子の間には誰も、妻も父親のようなメニーニアスも立ち入ることができない二人だけの絆と歴史がある。

護民官や市民たちを怒らせ、殺されそうになったコリオレイナスに、母はもっとおとなしくするように（“Why did you wish me milder?”（III. ii. 14））、権力を身につけるまでは本性を偽るように（“I would dissemble with my nature where ／ My fortunes and my friends at stake required ／ I should do so in honour.”（III. ii. 64-66））と警告する。母は民衆におもねるという、コリオレイナスにとって屈辱的な役割を押し付ける。

Volumnia

I prithee now, sweet son, as thou hast said
My praises made thee first a soldier, so,
To have my praise for this, perform a part
Thou hast not done before. (III. ii. 109-12)

母からの賞賛の言葉を餌に、息子に市民たちに頭を下げるという役を演じさせようとする様は、あたかも幼児を相手にしているようである。しかもヴォラムニアは、強制的に（“Why force you this?”（III. ii. 53））大人の息子に指図をする。コミニアスなどの上官の指図ではなく、母親の命令というころが異常である。彼女は家父長制の代理人としての顔をもち、「母性愛」という名のもとに、統制し、管理し、束縛し、支配する。ヴォ

ラムニアの表象は、女の快楽をそぎ落とした母の姿、「父の法」を家庭内で唱え、ローマの家父長制を具現させる姿である。戦争で十二分に働いた息子に、すぐさま次の目標を掲げそれに向けて叱咤激励する。ヴォラムニアは、かつて自分の肉体に宿していた息子を他者として突き放してみることができない。子供との一体感ゆえに自分の欲望を若い肉体に投影し、自己実現のための道具、手段とみなしてしまう。彼女はコリオレイナスを支配し、コリオレイナスは母の所有物となっている。コリオレイナスの問題点は、母親によって家庭化されていて、十分に社会化されていないことである。

Ⅲ　母親の説得

（1）自立への旅立ち

ローマ追放の日、涙にくれ、勇気に欠けたヴォラムニアの姿がある。危険な戦争に赴く日には晴れやかに息子を送り出したヴォラムニアが、不名誉な追放という処置に挫折を味わい、涙を流す弱気な母になっている。彼女の自己実現の手段が崩壊したのである。コリオレイナスが別れ際に母に言う言葉は痛々しい。

> *Coriolanus*　My hazards still have been your solace, and—
> Believe't not lightly—though I go alone,
> Like to a lonely dragon that his fen
> Makes feared and talked of more than seen, your son
> Will or exceed the common or be caught
> With cautelous baits and practice.　(IV. i. 29-34)

執政官になれずローマ追放の憂き目を見ることは、母の昔からの夢を破り母をこのうえなく絶望させていることを認識しているからこそ、このような言葉が出てくる。ここで母に“a lonely dragon”(31) として功績を

たてることを宣言しており、彼が胸中に何かを秘めていることがうかがえる。“your son”（32）と三人称で自分を指しているのは、母の立場に立って考えているからであろう。

母のもとを離れたコリオレイナスには、自立に向けての時間が訪れる。アンシャムでの仇敵オーフィディアス邸の前での、この世の空しさを認識する言葉、“O world, thy slippery turns!”（IV. iv. 12）や、“I also am ／ Longer to live most weary”（IV. v. 95-96）という言葉に、これまでにはなかった挫折したコリオレイナスが表象される。しかし皮肉にも、追放はコリオレイナスが成長するチャンスであった。コリオレイナスは生まれ故郷を憎む（“My birthplace hate I, and my love's upon ／ This enemy town.”（IV. iv. 23-24））ことによって、ローマに尽力した自分を否定し敵地で新しい自分を誕生させようとしている。オーフィディアスは、コリオレイナスがヴォルサイのために竜のように戦うさまを描写する。

> *Aufidius* . . . he bears all things fairly
> And shows good husbandry for the Volscian state,
> Fights dragon-like, and does achieve as soon
> As draw his sword, (IV. vii. 21-24)

また、メニーニアスはコリオレイナスが人間から翼を持った竜へ変容し、飛翔するコリオレイナスの姿を印象づける。

> *Menenius* This Martius is
> grown from man to dragon. He has wings, he's more
> than a creeping thing. (V. iv. 12-14)

メニーニアスは、アレクサンダー大王（V. iv. 22）にも比肩するような権力をを身につけたコリオレイナスの脳裏から、最愛の母の姿が消えている（“ . . . he no more remembers his mother now than an eight-year-

old horse" (V. iv. 16-17)) と考えており、母と別れて自分を生み直そうとしているコリオレイナスの成長を裏付ける。火を吐くといわれる竜に相応しく、コリオレイナスはローマを焼き尽くすことで、「恩知らずの祖国」"[my] thankless country" (IV. v. 71) に復讐しようとする。復讐という母の願いとは裏腹のことを計画する彼に、母の支配から逃れた自立を読みとることができる。ローマへの慈悲心を請いに出かけたコミニアスは、彼の懇願を拒否したコリオレイナスを描写する。

> *Cominius* He could not stay to pick them in a pile
> Of noisome, musty chaff. He said 'twas folly,
> For one poor grain or two, to leave unburnt
> And still to nose th'offence. (V. i. 25-28)

コリオレイナスにとって籾殻の山から実の入った粒を選り分ける暇はない。その一粒や二粒の中には、彼の母や妻、息子も入っている (*Menenius*: "For one poor grain or two! / I am one of those; his mother, wife, his child . . . " (V. i. 28-29)) のだが、彼はあえて眼をつぶっている。コミニアスの次に嘆願に現れたのは、コリオレイナスの父を自負しているメニーニアスであった。彼を一言のもとに追い払いながら、コリオレイナスは "Wife, mother, child, I know not." (V. ii. 80) と家族を否定する。メニーニアスは、この時の面会の印象でコリオレイナスに慈悲心があるとすれば雄の虎にミルクがあることになる ("Mark what mercy / his mother shall bring from him. There is no more / mercy in him than there is milk in a male tiger." (V. iv. 26-28)) と面白い比喩をもちだす。ローマを離れてほんの僅かの間にコリオレイナスは変化したのである (*Sicinius*: "Is't possible that so short a time can alter the / condition of a man?" (V. iv. 9-10))。ここには、母の呪縛から解かれ、ローマという「国家」の束縛からも脱した、権力を縦横無尽に操る「自由」な精神のコリオレイナスがいる。

このようなコリオレイナスに対して、ヴォラムニアは、その「反逆」を抑え込み、再び支配するために尽力する。プルタークでは妻が説得するが、シェイクスピアでは、その主役は母である。それは軍国主義下の母として国家権力に寄り添う母性ファシズムとでもいうべきもので、彼女はローマへの忠誠心に身を浸している。ヴォラムニアが、コリオレイナスの頑な心をいかに解きほぐしていくかが見物である。かつてヴォラムニアは，戦争下では最善の目的のために策略を用いるのだから、平和時にも名誉と策略は手をつないでよいと主張した。

> *Volumuina* Honour and policy, like unsevered friends,
> I'th' war do grow together. Grant that, and tell me
> In peace what each of them by th'other lose
> That they combine not there. (III. ii. 44-47)

息子によってローマが焼き尽くされようとしている今、彼女は躊躇することと無く策略を用いる。なぜならヴォラムニアにも、嫁、孫、元老院や貴族にも危険が迫っているのであるから，彼女は自分の本性を偽ってみせることを恥じない（III. ii. 64-66)。

ローマに貢献したにもかかわらず執政官の椅子を持ち去られ、挙げ句の果てに追放されたコリオレイナスは、ローマの武将としてのアイデンティティを喪失せざるをえなかった。彼の喪失感を癒し生きるための目標が、ローマへの復讐であった。このような心理的プロセスをヴォラムニアは理解するはずも無く、彼女は説得をかってでる。ヴォラムニアは嫁と孫とヴァレーリアを伴って復讐を止めさせるために全力投球する。ヴォラムニアと息子の心理的な闘いの幕が切って落とされる。

（2）ヴァージリアのセクシュアリティを利用

嘆願にやって来た三人の女たちと息子の順番は、ヴァージリア、ヴォラムニア、ヴァレーリア、小マーシャスである。

Coriolanus Shall I be tempted to infringe my vow 20
In the same time 'tis made? I will not.
Enter Virgilia, Volumnia, Valeria, Young Martius, with attendants
My wife comes foremost; then the honoured mould
Wherein this trunk was framed, and in her hand
The grandchild to her blood. But out, affection!
All bond and privilege of nature break; 25
Let it be virtuous to be obstinate.
[*Virgilia curtsies*]
What is that curtsy worth? Or those doves' eyes
Which can make gods forsworn? I melt, and am not
Of stronger earth than others.
Volumnia bows
My mother bows,
As if Olympus to a molehill should 30
In supplication nod; and my young boy
Hath an aspect of intercession which
Great nature cries 'Deny not'. Let the Volsces
Plough Rome and harrow Italy! I'll never
Be such a gosling to obey instinct, but stand 35
As if a man were author of himself
And knew no other kin.
Virgilia My lord and husband.
Coriolanus
These eyes are not the same I wore in Rome.
Virgilia
The sorrow that delivers us thus changed
Makes you think so.

Coriolanus Like a dull actor now 40
I have forgot my part, and I am out
Even to a full disgrace, [*Rising*] Best of my flesh,
Forgive my tyranny, but do not say
For that 'Forgive our Romans'
[*Virgilia kisses him*]
O, a kiss
Long as my exile, sweet as my revenge! 45
Now, by the jealous queen of heaven, that kiss
I carried from thee, dear, and my true lip
Hath virgined it e'er since. (V. iii. 20-48)

『プルターク英雄伝』では、ヴォラムニアが先頭にやってきて挨拶し、キスをする。シェイクスピアは、なぜヴォラムニアの代りにヴァージリアを最初に登場させ、挨拶させてキスをさせたのであろうか。これこそがヴォラムニアのとった一番目の戦略で、まず、妻のヴァージリアを前面に押し出し、息子を性的に誘惑するのである。

コミニアスは、コリオレイナスに慈悲を嘆願できるのは、彼の母と妻以外にはないと述べている。

Cominius Unless his noble mother and his wife,
Who, as I hear, mean to solicit him
For mercy to his country— (V. i. 71-73)

"solicit" は、OED によると "1. to entreat or petition (a person) for, or to do, something, 2. of women: To accost and importune (men) or immoral purposes" である。表面的な意味は、1の嘆願する意味であるが、2 の、女性が男性を誘惑する、を加味すると、ヴァージリアは夫を性的に誘惑するかのように先頭に行く、と解釈できる。妻や母の

姿を目撃したコリオレイナスがつぶやく最初の言葉 “tempted” (20) が示すように、彼はまさにここで妻から誘惑される立場にある。彼はあたかも “virgin[ed]” (48) で、ヴァージリアは、嘆願者であると同時に誘惑する求婚者 (*Volumnia*: “Even he, your wife, this lady, and myself / Are suitors to you.” (V. iii. 78-79)) なのである。実際ヴァージリアに会った途端、コリオレイナスはその鳩のような眼を見て、“melt” (28) する。彼は再度自分を立て直して家族を否定し、自分が自分の主人公、創造者 “author of himself” (36) だと呟く。“gosling” (35) は、OEDによると “1. a young goose, 2. fig. a foolish, inexperienced person; one who is young and green” であり、2 の意味で『コリオレイナス』のこの場面を例文として引用している。筆者は、2 以外に、1 の ‘a young goose’ が更に重要だと考える。つまり、本能的に母鳥の後を追うカモ、これがこれまでのコリオレイナスの姿と重ね合わされるからだ。コリオレイナスはカモになるのを止め、自分自身を生み直し、創造しようとしているのだが、それはヴァージリアの甘いキスを受けることで揺らぎ、自分の役割を忘れそうになっている (41)。パーカーは、コリオレイナス凱旋の場面 (二幕一場) では、ヴォラムニアが先に息子を迎えているのに、五幕三場ではヴァージリアが先に夫と会話しているのは、ヴァージリアがヴォラムニアに抵抗する強さをもってきたからだと考えている。

> Certainly, on first acquaintance Virgilia seems exactly the sort of timid, uncompetitive wife Volumnia would choose. Before the end of 1.3, however, she has revealed a quiet will of her own, which subsequent scenes confirm; and there is a growing realization that in her ‘gracious silence’ (2.1.171) she represents for Martius a physically based tenderness that is strong enough to resist Volumnia’s interference. This is strikingly demonstrated in 5.3 when Shakespeare reverses the earlier order of greetings

in 2.1 to have Coriolanus give Virgilia a kiss 'Long as my exile' (5.3.45) before turning to kneel before－but not embrace－his mother: both alterations of the source.[7]

しかし、筆者は、ヴォラムニアが戦略的に嫁を先頭に出し、彼女のセクシュアリティを利用し、久しぶりのヴァージリアのキスでコリオレイナスの復讐心を和らげようとしていると解釈する。

（3）ヴォラムニアの懐柔策

Coriolanus You gods, I prate,
And the most noble mother of the world
Leave unsaluted! Sink, my knee, i'th'earth; 50
He kneels
Of thy deep duty more impression show
Than that of common sons.
Volumnia O, stand up blest,
Whilst with no softer cushion than the flint
I kneel before thee, and unproperly
Show duty as mistaken all this while 55
Between the child and parent.
[*She kneels*]
Coriolanus What's this?
Your knees to me? To your corrected son?
[*He rises*] (V. iii. 48-57)

母と息子の葛藤に満ちた心理的な闘いが始まる。ヴォラムニアは息子の翻意を促すために、さまざまの戦術を繰り出す。以前の管理、支配、強制とは反対に、まるでオリンパスの山がモグラの丘に嘆願するかのように

(30) 息子に頭を下げる懐柔策をとる。息子に頭を下げて頼むことを "dishonour" (III. ii. 126) と語っていた母のこの言動は、"unnatural scene" (V. iii. 185) の一つとしてコリオレイナスを驚愕させる。子供が親に跪くべき義務を持っているのに、ここでは母の自分が石よりも硬い膝当てをして息子に膝を突いて嘆願しているために、"unproperly" (54) という語彙を使用する。ヴォラムニアは、母親が命令し息子が従うというこれまでの二人の関係パターンを転倒させた。R. パーカーは、息子に跪くヴォラムニアの行為を次のように解釈する。

> First Martius kneels to his mother, as he did earlier in 2.1, but Volumnia, to his horror, tells him to stand up and kneels herself (which is not in Plutarch either); when Martius raises her in turn, Volumnia first calls for Young Martius' 'knee', then bids the other petitioners to 'shame' her son by joining her to kneel once more. The gesture is thus both submissive and aggressive, sincere and challenging, blending contradictions that even in *King Lear* were kept apart. The point when Volumnia finally rises from her knees is also important: if she remains kneeling (as in the Oxford text) till Martius' 'O mother, mother', this considerably weakens the threat of her last lines; whereas if, as seems to me more probable, she rises with the others at 'Come, let us go' (l.178), this emphasizes her tactic of withdrawal (seen earlier in 3.2) and makes Coriolanus' hand-clasp more significant because it prevents her leaving, as earlier in the scene she had to prevent him (l.132). [8]

パーカーの指摘のように、ここのヴォラムニアのジェスチャーには、服従的な面と攻撃的な面の両面がある。彼女は跪きながら、頭の中で次の

手を探っているはずである。彼女がいつまで跪いていたかであるが、筆者もヴォラムニアは 178 行で他の嘆願者と一緒に立ちあがってその場を戦略的に退こうとしたと考える。かつて、ヴォラムニアは、コリオレイナスを護民官や市民に謝罪させるのに、手に帽子を持つこと、膝のつき方など心より身振りの重要性を説いている。

Volumunia I prithee now, my son,
[*She takes his bonnet*]
Go to them with this bonnet in thy hand,
And thus far having stretched it—here be with them—
Thy knee bussing the stones—for in such business
Action is eloquence, and the eyes of th'ignorant
More learned than the ears—waving thy head,
Which offer thus, correcting thy stout heart,
Now humble as the ripest mulberry
That will not hold the handling; (III. ii. 74-82)

この時に教えた敷石に膝まずいて懇願するやり方を、彼女はここで意識的に実践している。息子の頑な心を溶かすために、彼女は巧みなパフォーマーとなっている。

IV ヴォラムニアの戦略的雄弁術

ローマの母がなすべき勤めの一つに子供に雄弁術を教えるということがあるが、以下の説得の場面は母としてのヴォラムニアがいかに雄弁術に長けているかの証左となる。コリオレイナスの固い心を溶かすための母の戦略がさまざまに展開される。

(1) ローマは母の胎に等しい。

ヴォラムニアは自分とヴァージリアほど不幸せな女はこの世にいない（“How more unfortunate than all living women ／ Are we come hither”（V. iii. 98-99））ことを訴え、コリオレイナス追放以来の家族の悲しみ、苦悩をぶちまける。

Volumnia Whereto we are bound, together with thy victory,
Whereto we are bound? Alack, or we must lose
The country, our dear nurse, or else thy person,
Our comfort in the country. (V. iii. 109-12)

ヴォラムニアは、自分たち家族が国のために祈るか、それともコリオレイナスの勝利を祈るか、ダブル・バインドの状況に置かれていることを嘆く。しかし、注意すべきことは、ヴォラムニアは息子の胸中を理解しようという母ではなく、あくまでも母国を救済しようとする愛国者であることだ。彼女は、ローマが国民に乳を与え育てる乳母だと考えており、その母国を息子よりも優先している。彼女がかつて「スパルタの母」であったことと、軍国主義ローマの賢母であることは通底している。ヴォラムニアはローマという国家を母の子宮と同一視し、母なる母国を攻略することは、コリオレイナスを産んだ母の胎を踏みにじるという主張を展開する。

Volumnia . . . thou shalt no sooner
March to assault thy country than to tread—
Trust to't, thou shalt not—on thy mother's womb
That brought thee to this world. (V. iii. 123-26)

コリオレイナスに従順で反抗したことのない妻のヴァージリアでさえも、ローマへの復讐が彼の子供を産んだ自分のお腹を踏みにじることになると警告し、ヴォラムニアの主張を支持する（“Ay, and mine, ／ That brought you forth this boy to keep your name ／ Living to time.”

(V. iii. 126-28))。ローマへの攻撃が母や妻のお腹を踏みにじるという考えは、戦争で敵の母や妻や娘のお腹を踏みにじったはずのコリオレイナス(V. vi. 121-23) にとって、忘却できない生々しい経験であろう。しかし、この時点ではコリオレイナスの強固な決意は、女や子供の涙もろさに染まらない ("Not of a woman's tenderness to be / Requires nor child nor woman's face to see" (V. iii. 130-31))。

翻意しないコリオレイナスにヴォラムニアは、ローマにいた頃のコリオレイナスの母に対する態度を殊更にもちだす。

Volumnia There's no man in the world
More bound to's mother, yet here he lets me prate
Like one i'th' stocks. (V. iii. 159-61)

"More bound to's mother" の注には、"(a) more indebted to his mother、(b) more emotionally dependent on his mother"[9] とある。コリオレイナスが並外れて母への依存心が強いことは事実であるが、義務を重んじる父権制の担い手であるヴォラムニアのことだから、母への恩義という観点から読みたい。

Volumnia Thou hast never in thy life
Showed thy dear mother any courtesy,
When she, poor hen, fond of no second brood,
Has clucked thee to the wars and safely home,
Loaden with honour. Say my request's unjust, 165
And spurn me back. But if it be not so,
Thou art not honest, and the gods will plague thee
That thou restrain'st from me the duty which
To a mother's part belongs. (V. iii. 161-69)

ヴォラムニアは 'me' の代わりに "thy dear mother" (162) とわざわざ述べ、母親を強調する。これまで一度も孝行をしたことがなかったという客観性のない言葉 (161-62) は、母の期待通りに動かされたコリオレイナスの個人史を知っているわれわれには、初めて母への抵抗を示す息子への恨みっぽい言葉としか聞こえない。「あわれな母鳥はお前のほかに雛を望まなかった」(163) には、子供を一人しか産まず (プルタークでは二人)、また再婚もせずに生きてきたヴォラムニアの意地がある。すべての愛情をたった一人の息子に注いだあげくに、「反逆」された母の悔しさが滲み出る。また、彼女は口癖である、母に尽くすべき義務をもちだし、子としての義務を怠れば神々も許さないなどと脅迫めいた (167) ことを言う。印象的なのは、彼女は息子が親に対して払うべき義務はもちだすが、自分の母としての愛情を表明することは決してしないことである。一方、コリオレイナスはシシニアスの指摘のように、母を愛して止まなかった ("He loved his mother dearly." (V. iv. 15)) し、その精神構造には，母の存在が巣くっていたとも言えるのである。

(2) 母であることの否定

ヴォラムニアのとどめの言葉は、屈服しない息子へ、その母であることを否定するという、極めて冷酷なものである。

> *Volumnia* This fellow had a Volscian to his mother;
> His wife is in Corioles, and his child
> Like him by chance.—Yet give us our dispatch.
> I am hushed until our city be afire,
> And then I'll speak a little.
> *He holds her by the hand, silent* (V. iii. 179-183)

まず息子を軽蔑的に "This fellow" (179) と呼び、彼の母がローマ人でなくヴォルサイ人だと断言して人種差別的な貶めをする。ヴォラムニアは

自分が母であることを拒否するだけでなく、コリオレイナスの妻と息子までもローマ人であることを否定する。(妻はコリオライにおり、息子はたまたま彼に似ているという捨てセリフを吐く。) コリオレイナスの母であることを否定することで、ヴォラムニアの息子という彼のアイデンティティを解体しようとするこの言葉は、過度に母に依存しているコリオレイナスを傷つける。それは我が子に対して決して使うべきではない、言葉の暴力である。また、去り際の、これ以上はもう話さないという沈黙の宣言には、「反逆」を続ける息子への怒りがある。この直後、コリオレイナスは黙って母の手を取るが、沈黙のまま母の手を取るこの行為をR. パーカーは、

> This is an ambivalent gesture, of loving reconcil; ation and acceptance on the one hand but of surrender and emotional dependence on the other: [10]

と解釈し、和解と依存という矛盾したジェスチャーをみている。

(3) 母の勝利

Coriolanus (*weeping*)　　O mother, mother!
What have you done? Behold, the heavens do ope,
The gods look down, and this unnatural scene
They laugh at. O my mother, mother, O!
You have won a happy victory to Rome;
But for your son, believe it, O believe it,
Most dangerously you have with him prevailed,
If not most mortal to him.　　(V. iii. 183-90)

コリオレイナスが泣きながら母親に呼びかける 183 行には、万感の思いが込められている。それは、あたかも母親に見捨てられそうな幼児が、母親に助けを求めて泣く様と重なる。コリオレイナスは、自分が母の嘆願に

屈服することが極めて危険であり命取りになるかもしれないことを察知している。彼は、またもや自分に "your son" (188) という三人称を使っている。この三人称使用は、コリオレイナスが母親に操られる自分を客観視した結果と考えられよう。コリオレイナスは、母親に服従した自分を正当化するために、オーフィディアスに母親の頼みを振り切れるかどうか尋ねる ("Now, good Aufidius, / Were you in my stead would you have heard / A mother less, or granted less, Aufidius?" (V. iii. 192-94))。オーフィディアスは、慈悲心と名誉の狭間で揺れるコリオレイナスの心の動揺を歓迎する ("I am glad thou hast set thy mercy and thy honour / At difference in thee." (V. iii. 201-2)) が、結局, コリオレイナスの胸中には、慈悲心のほうが喚起される。コリオレイナスは、心理学的に言う、いわゆる息子による母殺しができなかったのである。コリオレイナスは母との闘いに破れてローマを母や妻に渡し、ヴォラムニアはローマを劫火から救った恩人、ローマの命 "patroness, the life of Rome" (V. v. 1) として勝利をおさめる。ヴォラムニアの功績はコリオレイナスも指摘するように、神殿を建ててもらえるほど偉大である ("Ladies, you deserve /To have a temple built you. (V. iii. 207-8))。ヴォラムニアは、息子を説得することで息子を失うことになるが、元老院、執政官、貴族そして敵対していた護民官や平民からも大歓迎を受け、ローマの偉大な母になるのである。

ヴォラムニアがコリオレイナスの死を嘆く場面はテクストになく、オープン•エンディングとなっている。ヴォラムニアは、ローマと和平を結んで死んだ息子を誇るのであろうか。ヴォラムニアは、ローマによって自己犠牲的な母性愛の素晴しさを受容させられ、結局、息子を犠牲にしてしまう。彼女は直接息子を殺してはいないが、母への服従がコリオレイナスを死に追いやったことは明らかである。母のもとを離れ、再生しようとしていたコリオレイナスは、オーフィディアスに殺される以前に、すでに母によって潰されたのである。救われない気持ちに駆られるのは、ヴォラムニア自身が最後までそれに思い至る気配がないことである。ヴォラムニアは

コリオレイナスの人生を奪い、支配し、死に至らしめたことに気付かない。ローマとは、自分の子を食べる不自然な母、"That our renowned Rome, . . . like an unnatural dam / Should now eat up her own!" (III. i. 293-96) だとメニーニアスが嘆くが、ローマとヴォラムニアは重なる。ローマがコリオレイナスを飲み込むように、ヴォラムニアは息子を飲み込んだのである。ヴォラムニアの名前の語源は、volumen であり、book, volume の意味がある。[11] 彼女の名は、まさに母性のはらむ闇、暗く、深い穴である。息子を死に追いやる「母性」という点に着目したい。

コリオレイナスを翻意させて意気揚々と "So, we will home to Rome" (V. iii. 173) と話すヴォラムニアの表現にあるように、この作品では home = Romeであり、しかもhome という語は、シェイクスピアの他のどの作品よりも*Coriolanus* に多い。ヴォラムニアは、ヴォルサイとローマに和平を結ばせる使徒としての役割を果たした。ヴォラムニアには、それ以外の選択肢がなかったのであろうか。国と個人の幸福は、必ずしも合致せず、むしろ相対立することも多い。ヴォラムニアは、息子よりも国を優先させ、ローマの軍事体制の維持、強化、再生産に寄与したローマの永遠の母となった。

V　ヴァージリア

ヴォラムニアが嫁のヴァージリアをどのように支配、管理し、それが「国家」とどのような関連をもつかを探ろう。まず、縫い物をしながら、戦場に出かけているマーシャスを待つ一幕三場の母と妻の時間である。

> *Volumnia* I pray you, daughter, sing, or express yourself in a more comfortable sort. If my son were my husband, I should freelier rejoice in that absence wherein he won honour than in the embracements of his bed where he would show most love. (I. iii. 1-5)

「もし私に夫がいるならば」という代りに、「もしわたしの息子が夫であったならば」と唐突に切り出すヴォラムニアの仮定法そのものが、ヴォラムニアとコリオレイナスがカップルであるかのような印象を与えて異様な感じを免れない。ヴォラムニアはヴァージリアを「娘」(1) と呼んでいるが、ここ以外にも他の二個所 (I. iii. 15, V. iii. 156) において「娘」と表現する。ヴァージリアはコリオレイナスの妻というより、「家父長」としてのヴォラムニアの娘としての地位にあるように思える。ヴァージリアは戦争に行った夫の身を案じ、何も語らず、いわば欝状態にある。息子を戦争に出したヴォラムニアは生き生きと張り切っているのに、「嫁」は歌も歌わず憂鬱そうで、「家」に囲い込まれた女である。

この伝統的な閉じられた家に、若くて明朗な女性ヴァレーリアが訪問し、外から新鮮な空気を運び込む。ヴァレーリアは、"manifest house-keepers" (I. iii. 52-53) として、縫物をしているヴォラムニアとヴァジーリアを外出させようと気を配る。特に、夫が戦争から帰るまで家の中に閉じこもり、もう一人のペネローペ (Penelope) になろうとしているヴァージリアを、外の空気に触れさせようと熱心に誘う。ヴァレーリアは女同士の連帯、シスターフッドを感じさせる存在である。

Valeria Come, lay aside your stitchery. I must have
you play the idle housewife with me this afternoon.
Virgilia No, good madam, I will not out of doors.
Valeria Not out of doors? 75
Volumnia She shall, she shall.
Virgilia Indeed, no, by your patience. I'll not over the
threshold till my lord return from the wars.
Valeria Fie, you confine yourself most unreasonably.
Come, you must go visit the good lady that lies in. 80
Virgilia I will wish her speedy strength, and visit her

with my prayers, but I cannot go thither.

Volumnia Why, I pray you?

Virgilia 'Tis not to save labour, nor that I want love.

Valeria You would be another Penelope. Yet they say 85
all the yarn she spun in Ulysses' absence did but fill
Ithaca full of moths. Come, I would your cambric were
sensible as your finger, that you might leave pricking
it for pity. Come, you shall go with us. (I. iii. 72-89)

お産の床についている女性のお見舞への誘いは、出産が戦時中の生めよ、増やせよという国家の施策と関連する片鱗を見ることができるであろう。ヴァレーリアは、縫い物ばかりして閉じこもっているヴァージリアに、主婦を怠けよう（73）と誘っている。ユーモアがなく、堅苦しい空気の淀んだこの家に、ヴァレーリアが一陣の風を入れる。しかし、ヴァージリアは夫が戻るまで戸口を出ないと言い張り、彼女は自分のセクシュアリティを自分で規制し、閉じ込めておくことに安心を見い出している。ヴァージリアは、家庭にこもって縫い物や刺繍など「女らしい」仕事に専念することが「よい女」であるというステレオタイプに囚われている。ヴァレーリアは、閉鎖的な世界にいるヴァージリアの不健全さを警戒し、ヴァージリアの気持ちを外界に向けさせようとする。ユリシーズ（Ulysses）の妻のペネローペは、夫がトロイの包囲で 20 年間留守をしていたときに、家で機織りをして言い寄る求婚者を追い払った貞節な妻である。しかし、ヴァレーリアは、ペネローペが糸を紡いでいたら、男たちが糸に操られるように言い寄ってきたというアイロニーを語る。更に、針を刺される麻布が可哀相だともユーモアたっぷりに述べる、ウィットに富んだ女性である。初期近代英国における針仕事は、椅子に腰掛け、頭を垂れ、いかにも女らしい仕事であったが、レーナ・オーリン（Lena Cowen Orlin）は、針仕事に対するヴォラムニアとヴァージリアの相違を論じる。

> Indeed, for every Virgilia, for whom needlework is stage shorthand to establish virtue and industry, there is a Volumnia, for whom needlework cannot adequately encompass character, ambition, or motivation. [12]

確かに、ヴァージリアと違ってヴォラムニアの野心や欲求は余りに大きく、針仕事だけに満足できる女ではない。では、ヴァレーリアはどうか。ヴァレーリアは、針仕事が女を抑圧し、家に閉じ込め、公共の場所から追い出してしまうことを見抜いているように思える。[13]ヴァレーリアは、家にこもり、針仕事に専念したがるヴァージリアの「病気」の治療として彼女を戸外に出す必要性を感じている。

> *Valeria* Prithee, Virgilia, turn thy solemness out o' door and go along with us.
> *Virgilia* No, at a word, madam. Indeed, I must not. I wish you much mirth. (I. iii. 110-13)

しかし、家を守る「よい女」であることが至上命令となっているヴァージリアは、ヴァレーリアの再三の誘いを退ける。ヴァレーリアから夫の無事の朗報を受けてもをなお、ヴァジーリアの心は外に向かない。ヴァジーリアは、ヴォラムニアによれば、楽しい気分を害する女（“she will but disease our better mirth” (I. iii. 108)）で、暗い気分を伝染させる。ヴォラムニアは針仕事に囚われず、ヴァレーリアと一緒に出かけて気晴らしをする余裕を持ちあわせているが、ヴァージリアは “I must not” (112) のように、自分自身を徹底して抑圧している。女は、昔から欲望を抑圧せよと命じられ欲求不満に陥いり、抑鬱症、神経衰弱、ノイローゼになることが多々あったが、ヴァージリアは、このような病気になりかねない危険性を持っている。

ヴァージリアは、夫をめぐって義理の母と対立することも嫉妬もしない。

プルタークでは、コリオレイナスは母の選んだ女と結婚したことになっているが、シェイクスピアの場合は分らない。しかし、ヴァージリアがヴォラムニアにとって、お気に入りの嫁であることは想像できる。ヴァージリアは性別役割分業をヴォラムニアとともに再生産している。彼女は夫の身を案じるという不安や愛情を抱いているが、ローマの父権制を批判する視点は持ち合わせていない。ヴァージリアは男は外、女は内という、男女の性別役割分業を遵守している。彼女はローマの父権制に内属し、そのジェンダーの社会的構成に深く関わっている。戦争の最中、日常生活の中で一人息子を未来の戦士として養育しており、ローマの社会構造維持に貢献している。

コリオレイナスは、母との対話が数百行に及ぶのに対し、妻との対話はテクスト中わずか数行である。それも対話と呼べる代物ではない。二幕一場で凱旋の帰還を果たした夫を迎えるときも、ヴァージリアは笑顔ではなく涙で迎える。

Coriolanus My gracious silence, hail.
Wouldst thou have laughed had I come coffined home,
That weep'st to see me triumph? Ah, my dear,
Such eyes the widows in Corioles wear,
And mothers that lack sons. (II. i. 171-75)

プルタークではコリオレイナスを涙で迎えるのはヴォラムニアであるのに、シェイクスピアでは妻のヴァージリアである。ヴァージリアは、何も言わずに沈黙したまま、泣き顔で夫を出迎える。ヴァージリアの泣きはらした眼にコリオレイナスは、夫や息子を失ったコリオライの女たちの眼と同じものを見ている。彼女は登場する五場面のうち、その四場面で泣いている。ヴァージリアの涙は、火を吐く竜となるコリオレイナスの怒りの炎を消す役目となる(五幕三場)ものでもある。ヴァージリアは、マーシャス凱旋のとき(二幕一場)、コリオレイナス追放のとき(四幕一場)、護民官との対話

(四幕二場)、コリオレイナスの説得(五幕三場)のときに、涙を流している。ヴァージリアの涙は、彼女の個人的なものにとどまらない。ナンシー•ヒューストンは、「(ホメーロスの)イーリアスにあっては、女性たちの哀しみ、涙、嘆きは[戦争の目的の一つ]である」。つまり、彼女らの「涙」は意図されない結果ではない、と指摘する。[14] ヴァージリアの涙も、戦う男たちを励まし、応援し、栄光化する、戦争目的の一つとして機能していることに目を向けるべきである。

コリオレイナスの言葉を借りれば、ヴァージリアの眼は鳩のように、平和を願う柔和な眼であり、鎧も刺し貫くほどに鋭い（“He is able to pierce a corslet with his eye” (V. iv. 20)）眼のコリオレイナスの心を開かせる可能性を持っているのだが、二人のコミュニケーションは密ではない。コリオレイナスとヴァージリアは、ヴォラムニアゆえに親密な夫婦の関係を欠いている。

ヴァージリアは、義理の母が夫にさまざまな支配、干渉をすることに対して、何も口を挟まない。しかしながら、彼女が自分が権力を持たないことを嘆く場面がある。

> *Virgilia* [to Brutus]
> You shall stay too! I would I had the power
> To say so to my husband. (IV. ii. 17-18)

これは護民官のブルータスにヴァージリアが命令したときの言葉である。ヴァージリアは、ローマを追放された夫を止める力をもたなかったことを嘆息する。彼女の家庭内での立場は、父権制の抑圧のなかで権力をもたない嫁のそれである。しかし、彼女は家制度のなかで、家の重要性をしっかりと内面化している。彼女がシシニアスに投げつける手厳しい言葉、“He'd make an end of thy posterity” (IV. ii. 28) は、家制度の存続に血筋の継続性がいかに重要であるかを認識したもので、コリオレイナスの息子つまり、後継者を産んだ彼女ならではのものである。「家族」におけ

るヴァージリアの立場は、小マーシャスの母になったことによって、尊重され、堅固なものになっていく。ヴォラムニアがそうであったように、ヴァージリアも家庭内での女主人としての権威を、確立していっている。初期近代英国のジェンダー秩序の中で、ヴァージリアは女として下位に属しているが、家庭内での階級秩序においては母親の地位にあるので、権威を確立できるのである。

VI　小マーシャス

プルタークではコリオレイナスに二人の幼児がいるが、シェイクスピアのコリオレイナスには、息子は一人しかいない。コリオレイナスは、息子との対話がほとんどなく未熟な父親、父性欠如を指摘できる。普段の生活から小マーシャスを物語る事件がヴァレーリアによって語られる。

Volumnia　He had rather see the swords and hear a drum than look upon his schoolmaster.
Valeria　O' my word, the father's son! I'll swear 'tis a very pretty boy. O' my troth, I looked upon him o' Wednesday half an hour together: 'has such a confirmed countenance! I saw him run after a gilded butterfly, and when he caught it he let it go again, and after it again, and over and over he comes, and up again, catched it again. Or whether his fall enraged him, or how 'twas, he did so set his teeth and tear it! O, I warrant, how he mammocked it!
Volumnia　One on's father's moods.
Valeria　Indeed, la, 'tis a noble child.
Virgilia　A crack, madam.　(I. iii. 58-71)

幼いマーシャスが蝶をずたずたに噛んだ事件に、三人の女たちは小マーシャスの「男性性」の萌芽を読み取って喜んでいる。この "mammocked" (68) は、"tore to pieces: one of the play's recurrent images of dismemberment"[15] であり、小マーシャスがコリオレイナスと類似している例証である。この明るい色の蝶は、何を表しているのであろうか。この蝶が、弱く美しいものとして女性を表象すると考えられないだろうか。蝶を追いかけては放し、放しては追いかける有り様は、蝶をいたぶっているようで戦争で逃げ惑う女たちのイメージと重なる。戦争下では、女たちがレイプなど色々の災難に遭う (*Cominius:* "You have holp to ravish your own daughters and ／ To melt the city leads upon your pates, ／ To see your wives dishonoured to your noses" (IV. vi. 85-87))。コリオレイナスの息子も、蝶をずたずたに切ってコリオレイナスの行為を再生産している。蝶をずたずたにした小マーシャスは、家庭教師のさせる勉強よりも、剣を見たり、太鼓の音を聞いたりすることを好む (58-59)。つまり、彼は父親似の子供であり，武勇を最大の美徳とするローマのエトスに影響された軍国少年である。テクストにおける小マーシャスの唯一の言葉、"A shall not tread on me. ／ I'll run away till I am bigger, but then I'll fight." (V. iii. 128-29) は、祖国ローマを滅ぼす父への敵対宣言と解釈できる。ローマを守る幼き戦士は、コリオレイナス亡き後は祖母や母の応援のもとに母国を守る勇敢な戦士として育つことが予測される。残酷な行為を、元気な腕白な男の子として賛美する女たちの姿勢は、強い戦士を再生産していく。

ヴァージリアも加齢とともに自然な感情を薄れさせ、ヴォラムニアの「娘」としてヴォラムニア的人間に変貌していくのであろうか。かつて血を見るのを怖がっていた彼女が、自分の息子をローマのために戦場に送り出し、名誉のために戦死さえも厭わない軍国主義の母となる予感もする。ヴォラムニアは、「女の身体は、ただ一度の結婚と母性としての機能のためにのみ存在する」という考えのもとに、未亡人となった嫁のセクシュアリティを管理、支配するであろう。ヴァージリアもコリオレイナス亡きあ

と、若いころの息子を慈しむ感情が抑圧され、国のために喜んで息子を差し出す「スパルタの母」へと変貌する可能性が大きい。

Ⅶ 「母性」、「家族」、「国家」

『コリオレイナス』を読むと、「母性愛」が幻想であり、「母性」が抑圧構造として働きうることがわかる。ヴォラムニアは、母役割にのみ収斂されて自分自身を生きることがない。彼女の態度は、個人としての性格や性質だけに還元できない。それは、個人をはるかに超えて強大な力をもった構造、つまりローマの父権制、軍国主義という社会的な構造から考察されるべきである。ローマ父権制のなかでのヴォラムニアの位置は、「父」の役割を果たす母である。父権制は女性を蔑視するが、「母性」は礼賛するので、女は母として権力を行使できる。女は「母性」という舞台で抑圧者となる。ヴォラムニアは、女として「周縁」にいながら、母としてローマ父権制の「中心」に位置している。ヴォラムニアは息子のみならず、嫁のヴァージリアや孫といった「家族」に対しても、父権制の代理人として管理、支配、束縛する。「母性」がいかに戦争下において加害者の一端を担ったか。ローマとタークイン、ローマとコリオライとの闘いのなかで、ヴォラムニアの母性イデオロギーはローマに加担し、ナショナリズムと結託している。ローマの元老院たちも、コントロールのきかないコリオレイナスを母親をもちだして巧みに操った。

ヴォラムニアは、子供や孫をもつことで、重層的な時間をもてる立場にありながら、その特権を棄てた。彼女の生きてきた直線的な時間が、コリオレイナスや孫との接触で、「人生の全過程を底面とする巨大な円錐形としての時間」となり、彼女は、「さまざまな位相の時間を螺旋的な同時性において蘇らすこと」[16]ができたはずである。つまり、過去と現在、未来と過去が自由に行き交い、直線の時間は子供の存在により別の位相が付け加えられ、孫を見ることによってコリオレイナスの幼少が想起され、さらに自分の幼少とも重ね合わされる。ヴォラムニアがこの特権を大切に思っ

ていれば、コリオレイナスを死に追いやることを防げたかもしれない。しかし、彼女は子供の幸福を第一に考える母親ではなく、軍国主義の母に徹した。さらに、小マーシャスも父と同様に、祖母や母によってローマの父権制の武将となるべく教育されていくであろう。ローマという国において、女の生殖、女の母役割、母らしさがいかに重宝で、利用しうるかということがみてとれる。子を産み育てることはそれ自体充足を与える要素をもつので、国がいかに生殖と母役割を支配し利用しても、それは不透明で見えにくい。結局、ヴォラムニアは、「母性」という罠で国家に利用されたのであり、彼女も被害者なのである。

注

1．以下の引用は、すべて *Coriolanus*, ed., R. B. Parker, The Oxford Shakespeare (Oxford and New York: Oxford Univ. Press, 1994) による。

2．舩橋恵子、堤マサエ『母性の社会学』(サイエンス社、1992年) 11頁では、母性を次のように論じる。「「母性」の諸側面としては，子どもにとって快いことばかりでなく、マイナスと感じられる側面も、とりあげられるべきである。たとえば、産むことも産まないことも、育むことも放棄することも、子どもへの愛も憎しみも無関心も、暖かさも厳しさも。現実の親子関係は矛盾や葛藤に満ちており、ネガティヴに見えることも、母性の真実の側面なのである。」

また、E. バタンデール『母性という神話』(鈴木晶訳、筑摩書房、1991年) 7頁では、母性愛について、「母性愛は人間的感情にほかならない。あらゆる感情と同様に、不安定で、もろく、不完全なものである。一般に浸透している考えとは反対に、おそらく母性愛は、女性の本性に深く刻み込まれているわけではない。母親の態度の変遷を観察すると、子どもにたいする関心や献身があらわれたり、あらわれなかったりすることが、また、愛情がある場合とない場合があることが、認められる。母性愛はプラスになったり、マイナスになったり、あるいはゼロになったりというふうに、さまざまな形をとってあらわれる」と述べている。

3．Coppélia Kahn, *Roman Shakespeare* (London and New York: Routledge, 1997), p. 146.

ルソーは、『エミール』の一説で、このスパルタの母を例にとり、母国への強い愛を抱いた「女性市民」として賞賛する。ジーン・ベスキー・エルシュテイン『女性と戦争』(小林史子、廣川紀子訳、法政大学出版局、1994年) 110頁参照。

4．若桑みどり『戦争がつくる女性像』(筑摩書房、1995年) 25頁に次のようにあ

る。「戦争•女性という問題は、戦争＝男性、平和＝女性といった二項対立によってではなく、相互補完的な一体として、一枚の銅貨の表裏のように引き離しがたい関係性をもって論じられなければならないことを確信した。女性は、家父長制度一軍事体制の権威的な構造のなかで被支配者であるとされている。だが、女性はこの構造のなかで、権威に従属し、みずからの役割に従順に、しばしば熱狂的に従うことによってこのシステムを支え、補完し、維持するための不可欠な一部であり続けた。」

5. *Coriolanus*, ed., R. B. Parker, *op.cit.*, "Introduction," p. 22.
6. 北本正章『子ども観の社会史』(新曜社, 1993年) 176頁。
7. *Coriolanus*, ed., R. B. Parker, *op.cit.*, "Introduction," pp. 22-23.
8. *Coriolanus*, ed., R. B. Parker, *op.cit.*, "Introduction," pp. 103-5.
9. *Coriolanus*, ed., R. B. Parker, *op.cit.*, p. 341 の注を参照。
10. *Coriolanus*, ed., R. B. Parker, *op.cit.*, p. 343 の注を参照。
11. Coppélia Kahn, *op.cit.*, p.150. "The word *volumen,* from which Volumnia's name may be derived, means that which is rolled, a coil, whirl, wreath, fold, eddy, or a roll of writing - a book or volume or part on one (Lewis 1890). The name can be associated with the complex interior circular spaces of the female reproductive organs as well as with the religious and legal textual inscriptions that delineate the social formation. In Shakespeare's play, Volumnia and virtus, womb and state, mother and son form a metaphorical and dramatic coil or fold which can be unrolled only for the purpose of analysis."
12. Lena Cowen Orlin, "Three Ways to be Invisible in the Renaissance," in *Renaissance Culture and the Everyday*, eds. Patricia Fumerton and Simon Hunt (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1999), p. 197.
13. *Ibid.*, p. 191. "The practice of needlework served to keep leisured women in their place, out of the public sphere, functionally invisible" に相応しい考えであろう。
14. 若桑みどり『戦争がつくる女性像』(筑摩書房、1995年) 103頁。
15. *Coriolanus*, ed., R. B. Parker, *op.cit.*, p.182 の注を参照。
16. 吉澤　夏子『女であることの希望』(勁草書房、1997年) 59頁。